

第 67 回新潟癌治療研究会

日 時 平成 19 年 7 月 28 日 (土)
午後 1 時 30 分～7 時 10 分
会 場 ホテル新潟 3 階 飛翔

2 外科療法を行った上顎歯肉扁平上皮がんの治療成績

新垣 晋・三上 俊彦・金丸 祥平
中里 隆之・新美 奏恵・小田 陽平
芳沢 亨子・斎藤 力・林 孝文*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
口腔生命科学専攻組織再建口腔外
科学分野
同 口腔生命科学専攻顎顔面放射
線学分野*

I. 一 般 演 題

1 酪酸ナトリウムによる口腔癌細胞に対する抗腫瘍効果

富田 智・岡田 康男*・又賀 泉**
片桐 正隆*

厚生連村上総合病院歯科口腔外科
日本歯科大学新潟生命歯学部病理
学講座*
同 口腔外科学第 2 講座**

酪酸ナトリウムはヒストン脱アセチル化酵素阻害剤の 1 つで分化誘導剤として知られており、ほとんどのヒストン脱アセチル化酵素の活性を抑制することでヒストンの高アセチル化を促すとともに、*p53* 非依存性に *p21* の誘導が可能となり、DNA 合成 (G1 期-S 期への移行) を阻害すると報告されている。これまで酪酸ナトリウムのヒト glioma 細胞における腫瘍増殖抑制効果についての報告はあるが、口腔扁平上皮癌細胞や抗癌剤耐性癌細胞における酪酸ナトリウムの抗腫瘍効果に関する報告はみられない。そこで今回、酪酸ナトリウムを用い、ヒト口腔扁平上皮癌細胞株における抗腫瘍効果に関する基礎的研究を行った。その結果、酪酸ナトリウム処理により CDDP 耐性株を含む口腔癌細胞の増殖・浸潤抑制効果があることを見出し、また、その機序としての細胞周期 (G1 期-S 期) の移行抑制、およびアポトーシス誘導について検討を行ったので報告する。

外科療法を行った上顎歯肉扁平上皮癌の頸部リンパ節転移様相、再発部位とその制御率、予後について検討した。

対象は過去 16 年間 (1990～2005) に外科療法を行った未治療の上顎歯肉扁平上皮癌 29 症例である。性別は男性 15 例、女性 14 例、初診時の年齢は 38 歳から 84 歳であった。T1 5 例、T2 11 例、T3 5 例、T4 8 例、初診時に頸部リンパ節転移を 7 例に認めた。腫瘍の占拠部位は前方 8 例、側方 7 例、後方 14 例であった。頸部郭清は 17 例 (両側 4 例) に行われ、転移はレベル I、II 領域に局限していた。再発部位は局所が 5 例、頸部が後発転移を含めて 8 例、遠隔転移が 3 例であった。局所再発の 5 例中 2 例、頸部転移・再発の 8 例中 6 例が制御されたが、遠隔転移 3 例は症状緩和のみであった。5 年累積生存率は 65 % であった。転帰は、生存 18 例、原病死 9 例 (局所 3 例、頸部 2 例、遠隔転移 4 例)、他病死 2 例であった。

3 口腔舌扁平上皮癌における原発巣切除断端部に関する臨床病理組織学的検討

佐藤 英明・田中 彰・山口 晃
又賀 泉*・岡田 康男**・片桐 正隆**
日本歯科大学新潟病院口腔外科
日本歯科大学新潟生命歯学部口腔
外科学第 2 講座*
同 病理学講座**

【目的】口腔粘膜扁平上皮癌において腫瘍周囲に存在する上皮性異形成の取り扱いは一定の見解が得られていないのが現状である。そこで切除断

端部上皮性異形成の評価において近年各分野で提唱されている扁平上皮内腫瘍(SIN)の分類を準用し外科的切除を行ったT1・T2舌扁平上皮癌を対象に臨床病理組織学的検討を行った。

【対象・方法】1995年1月から2006年6月までに原発巣根治切除を行ったT1・T2舌扁平上皮癌34例を対象とした。上皮異形成の分類に関しては日本口腔腫瘍学会の「舌癌取り扱い指針」SIN分類を準用した。

【結果】34例中切除断端部に上皮性異形成を認めた症例が16例であった。このうちSINに該当する症例は10例で再発が4例であった。再発した4例は2例が表層分化萎縮型2例が表層分化肥厚型であった。

【結論】切除断端部上皮性異形成の予後判定にはSINの分類が有用である可能性が示唆された。

4 当院口腔外科における舌癌症例の臨床的検討

齋藤 正直*・小林 孝憲*、***
 星名 秀行*・永田 昌毅*・藤田 一*
 新垣 晋**・斎藤 力**
 朔 敬***・高木 律男*
 新潟大学大学院医歯学総合研究科
 顎顔面口腔外科学分野*
 同 組織再建口腔外科学分野**
 同 口腔病理学分野***

【緒言】舌は言語や摂食・咀嚼・嚥下、味覚、審美的要素、愛情表現など、重要な機能が多く、治療方法の選択や、切除範囲の決定、再建方法には慎重な診断とQOL維持のための配慮が必要である。

【方法】新潟大学医歯学総合病院口腔外科開設以来1967年8月から2007年4月までの40年間を10年毎に、第I期から第IV期にわけ、舌癌一次症例260例の臨床所見や治療法の変遷、予後を検討。また、治療成績については根治的治療を行った231例を対象とした。

【結果】症例は男性が152例、女性が118例。平均年齢は全体60.8歳。好発部位は舌縁部。病期分

類はStage I, Stage IIの早期例が多く、近年では、Stage 0症例の増加を認めた。原発巣の治療法は化学療法群、放射線群、手術群、手術・放射線群と分類。5年累積生存率を、Kaplan Meier法を用い、年代別、治療法別、病期分類別で生存率を検討した。年代別では第IV期、第I期、治療法別では手術群、病期分類別では、Stage 0, I, II期が良好な治療成績であった。

5 導入化学療法により喉頭温存が可能であった下咽頭進行癌症例

佐藤雄一郎・窪田 和

県立がんセンター新潟病院耳鼻咽喉科

下咽頭癌は自覚症状を呈しにくいため初診時に進行癌であることが多い。治療成績もstage III, IV症例の5年生存率が約20～30%と予後不良の疾患である。下咽頭癌進行例の外科治療は下咽頭喉頭全摘、遊離空腸による咽頭食道再建という拡大手術で術後は喉頭喪失による発声機能障害、再建空腸の形態や蠕動運動による嚥下障害に悩まされる症例が多い。つまり本疾患の治療では生存率向上と喉頭機能温存の両立が重要な課題である。機能温存の代表は放射線治療だが腫瘍の放射線感受性を事前に判定できれば進行例であっても手術を回避することが可能になる。当科では下咽頭進行癌の治療方針決定に際し喉頭温存可能例を選別するための導入化学療法を検討することが多い。今回われわれは導入化学療法(TPF療法)が著効したため原発巣は放射線化学療法、頸部リンパ節転移には頸部郭清術を併用することで喉頭温存が可能であった症例を経験したので報告した。

6 がんセンター新潟病院における転移性腎細胞癌患者の survival の検討

若月 俊二・北村 康男・斎藤 俊弘

小松原秀一

県立がんセンター新潟病院泌尿器科

転移性腎細胞癌患者(淡明細胞癌の組織型)の癌特異的生存は以前より転移が生じてから平均1